

# 中学校社会科との連続性に配慮した 高校世界史の指導法の一考察

加賀 大学

## 1 世界史学習の現状と課題

世界史学習は高校で学ぶ生徒にとって、人名や地名のカタカナが多く覚えにくい、板書をひたすらノートに写す暗記科目といったイメージが強い。受験科目として世界史を選ぶ生徒が日本史に比べやや少ないことから、覚える(覚えきれない)事柄が多いという理由で、必修科目にもかかわらず世界史を敬遠している高校生の姿が見えてくる。国立教育政策研究所の教育課程実施状況調査(平成17年実施)の結果においても、「当該科目の勉強が好きだ」「当該科目の勉強は大切だ」「当該科目の勉強は入学試験や就職試験に関係なくても大切だ」「この科目を勉強すれば、私の普段の生活や社会生活の中で役立つ」等の質問に「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた生徒の割合は、いずれも世界史Bが日本史B、地理Bよりも低い数値となっている。また同調査で、「授業がどの程度わかりますか」という質問に「よく分かる」「だいたい分かる」と答えた生徒が世界史Bでは40%を下回ったことも昨今の世界史学習の現状を物語っていると言える。

高校では、資料の活用や思考力、判断力、表現力の育成に向けた授業改善が進みつつあるなかで、現実には、とくに普通科で大学入試に向けた対策の比重が高くならざるを得ず、結果として語句の理解や入試問題の出題パターンへの暗記など知識伝達型の授業から脱しきれない傾向もいまだに見られる。

生徒にとって高校での世界史学習は初めての体系だった世界の歴史の学習であり、指導に当たっては中高間の学習の円滑な接続を図ることが必要である。中学校社会科の歴史分野の学習内容は、次期の高等学校学習指導要領の改訂での設置の方向性が示されている共通必修科目「歴史総合(仮称)」の導入に合わせ、従来の日本の歴史の比重が高い構成から、世界の歴史の学習をバランスよく取り入れた構成に大きく改善されつつある。それでも高校入学後に初めて本格的に世界史を学習する生徒にとっては、歴史上の人物や出来事を通して世界の歴史の大きな枠組みと展開をとらえる力、世界の構造や成り立ちを歴史的視野から考察する能力はまだ十分に育ってはいない。高校での世界史学習のスタートに当たっては、「覚えることが多い」「国や地域ごとのつながりがつかみにくい」といったイメージをできる限り生徒に持たせないことが大切である。そのためには、発達段階を考慮した人名、年号などの精選と併せて、歴史を身近に感じさせる工夫や学習項目を地域や国ごとにまとめるなどの単元設定の工夫、そして歴史的事象どうしを関連付けた学習を図り、世界の歴史を動的、構造的に大きくとらえることができるような指導法の工夫が求められる。

## 2 大項目「世界史へのいざない」の効果的な活用の工夫

そうした工夫の一例として、以下に、世界史Aの大項目「世界史へのいざない」における主

題学習を取り上げ、中学校社会科との連続性に配慮した効果的な活用を工夫することで、日本の歴史と世界の歴史が密接に結びついていることに気付かせる指導例を考えてみたい。

世界史Aを対象としたのは、世界史Bに比べ入学年度またはそれに近い学年や年次で履修する高校が比較的多いこと、また「世界史へのいざない」での主題学習を対象とした理由は、この大項目の内容の取扱いについて、現行の高等学校学習指導要領では、「日本列島の中に見られる世界との関係や交流について、人、もの、技術、文化、宗教、生活などの適切な事例を取り上げ、年表や地図などに表す活動を通して、日本の歴史が世界の歴史とつながっていることに気付かせる」ことを学習のねらいとしていることから、歴史的事象について、中学校の歴史学習で比重の大きかった日本の歴史と関わらせて考察させることで、生徒の発達段階に応じて世界の歴史を身近に感じさせることが可能になると考えられるからである。

ここでは、生徒にとって中学校で学習した神奈川県にゆかりのある人、都市横浜の興隆の起点となった人物としてペリーに着目して、主題学習「ペリー来航の背景」を設定し、19世紀半ばのアメリカ合衆国の発展と膨張の一側面としてのペリーの日本派遣を、ヨーロッパ、アジア、太平洋地域との関わりの中で多面的、多角的にとらえることをねらいとした授業展開について考察したい。

### 3 主題学習のテーマ「ペリー来航の背景」の設定

世界史Aの教科書では「アメリカの発展」のあとに「アジア諸国の変貌」を学習する順序と

なっており、ペリー来航から日本の開国に至る過程は、大項目「世界の一体化と日本」の中項目エ、「アジア諸国の変貌と近代の日本」の小項目で取り上げることになる。その場合、アヘン戦争を契機とするイギリスの中国進出を学習した後に、今度は突然ペリーが来航するという印象を生徒は持ちがちになる。この考察では、中項目ウ、「ヨーロッパ、アメリカの工業化と国民形成」の「アメリカ合衆国の発展」に続けて「世界史へのいざない」のイ、「日本列島の中の世界の歴史」の主題学習を設け、ペリーの日本派遣の背景をアメリカ合衆国の発展と関連付けて考察させる単元構成を考えた。19世紀前半からのアメリカ合衆国の領土拡大、アメリカ・メキシコ戦争の経緯と蒸気機関の技術開発に伴う海軍の蒸気軍艦建造、太平洋での捕鯨業の展開と東インド艦隊の外交法権の発動としての漂流民保護など複数の視点から、「なぜアメリカは日本を目指したか」を考察させる授業デザインである。ペリー来航を19世紀半ばのアメリカ合衆国の発展と関連付けて学習させることで、ペリーの日本派遣が、当時のアメリカ合衆国が直面していた課題の打開のための一つの方策であったことへの理解が深まり、生徒の歴史的な見方・考え方の幅を広げ、歴史的思考力を育むことにつながると考えるからである。

## 4 単元の設定と本時の授業展開例

この案では、単元として、大項目「世界の一体化と日本」のウ、「ヨーロッパ、アメリカの工業化と国民形成」のうち、ウィーン体制以降の7時間ほどの学習を設定する。以下に単元の指導計画と本時の授業展開例を示す。

表1 単元の指導計画と本時の授業展開例

(1) 単元名	： 「ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成 (2)」
(2) 単元の目標	19世紀のヨーロッパ・アメリカの経済的・政治的変革について、産業革命による工業化の進展と貿易活動の拡大が進み、世界の構造的な一体化が進展したこと、ヨーロッパとアメ

リカ合衆国で国民国家形成の動きが高まったことを理解する。

基軸となる問い： ヨーロッパやアメリカ合衆国で人々はどうのように国民になっていったのだろうか。

(3) 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成の動きについて、関心を高め意欲的に追究しようとしている。

【思考・判断・表現】ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成の動きについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

【資料活用の技能】ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成の動きに関する資料から有用な情報を選択して読み取ったり、ワークシートにまとめたりしている。

【知識・理解】ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成の動きについて理解し、その知識を身に付けている。

(4) 単元の指導計画

- i) ウィーン体制・・・・・・・・・・1時間
- ii) イギリスの繁栄・・・・・・・・・・1時間
- iii) 二月革命と第二帝政・・・・・・・・・・1時間
- iv) イタリアとドイツの統一・・・・・・・・・・1時間
- v) 東方問題と19世紀のロシア・・・・1時間
- vi) アメリカ合衆国の発展・・・・・・・・・・1時間
- vii) 主題学習「ペリー来航の背景」・・1時間（本時）

(5) 本時の目標

ペリーの日本派遣の背景や経緯について、中学校で学習した成果を踏まえ、資料をもとに19世紀半ばのアメリカの置かれた状況と関連付けて世界史的視野に立って理解する。作業的な学習を通して地図などの資料を活用する力の習得を図る。

(6) 本時の評価規準

【思考・判断・表現】ペリーの日本派遣の背景や経緯について、多面的、多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

【資料活用の技能】ペリーの日本派遣の背景や経緯について、関連する資料から当時のアメリカの置かれた状況やイギリス、フランスのアジア政策と関連付けて読み取っている。

(7) 本時の指導過程

<導入>

◇前時の学習の確認

発問：19世紀半ばのアメリカと日本に関するできごとは？

<展開>

本時の問い： ペリーはなぜ日本を目指したのか？

【学習活動】

◇前時の「アメリカ合衆国の発展」で学んだ主なできごとをワークシートの年表にまとめる。

・アメリカ・メキシコ戦争を契機にアメリカで蒸気軍艦の建造が進んだことを補足する。

◇中学校歴史分野の教科書「ペリー来航」の箇所を読み、大統領フィルモアの国書（現代語訳）からペリー派遣のねらいが、どこにあったかを考察する。意見が出たところで①漂流民と船舶の保護、物資の補給と入港許可 ②燃料補給地（貯炭所）の確保 ③自由貿易 の3点にまとめ、

問①漂流民とは？クジラは何のために捕獲されたのか？ 問②貯炭所は何のために？石炭は何の燃料か？ 問③中国や日本などと貿易を進めようとした背景は？ についてはじめに個々で、次に班ごとに考察させ、ホワイトボードに考えを記入し全体に発表する。

**【班学習1】**

・生徒の理解の状況を見て補足説明（以下の3つの項目について記述のある教科書が少ないため）

- i) 太平洋の捕鯨業について（産業革命による鯨油の需要増など）
- ii) アメリカ合衆国の産業革命について
- iii) 対中国貿易について

◇ペリーの東インド艦隊の来日までの寄港地（琉球、小笠原を含む）を示し、それをもとに航路をワークシートの地図に描き込む。

発問：なぜ遠回りの航路だったのか？燃料の補給はどこで？だれから？なぜ蒸気軍艦で来航した？

◇【班学習2】問④日本への使節派遣でイギリスなどの他の西欧諸国はなぜアメリカに先を越されたのか？ 問⑤ペリー来航から5年後に日米修好通商条約が結ばれ貿易が始まるが、アメリカの対日貿易が伸びなかったのはなぜか？ の2点について、単元の前時までの学習を踏まえて班ごとに考察し、発表する。

◇アメリカ合衆国が南北戦争後にどのような歩みをたどったかを大観する。

**【指導上の留意点】**

- 中学校での学習で得た知識（モリソン号事件、太平洋での捕鯨など）を活用させる。
- 年表と地図（ペリーの航路）を活用した学習に一定の時間を確保し、歴史の共時性、同時性に着目させるとともに、生徒の空間認識の育成を図る。
- 班構成は5～6名の7～8班とし、【班学習1】では第1～第3班が問①を、第4、5班が問②を、第6～第8班が問③を、【班学習2】では第1～第4班が問④を、第6～第8班が問⑤を考察して、考察の過程や結果をまとめて発表させる。また自分の班が担当しなかった問いを他班がどのように考えたかに注目させ、自分の考察や自班の考察と協議に不足していた点に気付かせる。

**<まとめ>**

◇本時の問いを再度示し、本時の主題を当時のアメリカ合衆国の置かれた状況と関連付けて世界史的視野に立って考察した学習を振り返る。自分が考察した過程と結果、班で考察した過程と結果、他班の考察の良かった点などをワークシートに記入し、理解の深まりを確認する。

※ワークシートは、班学習での考察した過程や結果の記入欄を以下のように分け、自分の考えが、班での考察と協議、他班の発表から学ぶことでどのように深まったかを振り返ることができるようにする。（例）考察④

[考察④] 初めの自分の考え	班での考察のまとめ	班学習後の考え
.....	.....	.....
.....	.....	.....

## 5 今後の課題

高校生に見られる世界史学習を消極的に敬遠してしまう傾向を払拭し、生徒が有用感を持って世界史学習に主体的に取り組む態度の育成につながっていくには、中学校での歴史学習との連続性に十分に配慮した授業展開を工夫していくことが不可欠である。この授業展開例は考察も浅く、世界史Aの目標に即して基本的な事項・事柄を精選して指導内容を構成することと、主題学習でどこまで掘り下げた学習を展開させるかの兼ね合いなどの点で工夫を重ねていく余地を多く残しているが、今後、世界史を学ぶ意味を実感させる指導の充実のために、高校の世界史担当者が意識していくべき視点を挙げておきたい。

第一に、高校の地理歴史科教員が中学校社会科の学習内容と指導の実践を十分に把握しておくことである。筆者の経験からも中学校の教科書を隅々まで確認している高校教員は多いとは言えない。ここ数年、中学校社会科歴史分野で世界の歴史の比重が高まりつつあることは、高校の世界史学習にとっては大きなプラス要因である。中学校で必ず学習するペリーやフランシスコ・ザビエルなど日本と関わりの深い人物を多面的、多角的に取り上げることで、日本の中の世界の歴史と世界史の中の日本という二つの視点を持たせることも可能になる。中学校での指導の実践の蓄積を高校側が生徒の発達段階に応じた指導に生かしていくことが求められる。

二つめに、年表や地図の積極的な活用と地域の資料館、図書館などの活用を通して作業的、体験的な学習の充実を図りたい。この授業展開例では、アメリカ合衆国の発展についての既習事項を年表にまとめ、ペリー艦隊の来日までの航路を地図に描き込む作業を取り入れ、歴史的事象を時間的、空間的に正しく位置付け、時代的背景や地理的条件との関連性を考察する力の育成をねらった。また、資料として大統領フィルモアの国書を用い、世界の歴史に関する情報

を収集し、収集した情報を整理する技能や、資料を解釈し表現したり説明したりする技能など世界史学習の基本的技能に触れさせることを意図した。年表、地図、資料の積極的な活用を図ることで歴史的思考力育成の手立てとしたい。さらに、地元神奈川にゆかりのあるペリーを取り上げることで、横浜開港資料館やペリー記念館、また横浜開港も含めた郷土史関係図書等の所蔵の豊富な横浜市立中央図書館の活用など体験的な学習の幅も広げることができる。身近な地域の歴史が世界の歴史につながっていることを実感させるうえで効果的であり、学校の授業のみで終わらせずに教室の外での学習を設定することは、「覚えることが多い」という生徒の世界史学習へのイメージを覆すことにもつながる。

最後に「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について触れておきたい。この授業展開例では、対話的な学びについて、班学習を通して自分とは異なる考え方に触れさせ、自分の考察や班での考察、協議に不足していた点に気付かせることで、多面的で深い理解と知識や技能の定着を図った。別表でも触れたが、ワークシートに班学習が進むにつれての考えの深まりを記入できるようにしておくなどの工夫も効果的であろう。主体的な学びについては、本時の学習内容の単元の中での位置付けを生徒にきちんと認識させ、前時までの学習を振り返りながら、生徒自らが見通しを持って学習に取り組む姿勢を育てていくことが大切である。主題学習に当たって、なぜこのテーマを設定するのかを本時の目標を明示して生徒に理解させたうえで学習活動を展開することがポイントとなる。

「主体的・対話的で深い学び」については、今般改訂された中学校学習指導要領及び中学校学習指導要領解説社会編において、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせることが重視されている。今後、高校では、生徒が中学校で身に付けてきた歴史的な見方・考え方の基礎の

上に、新科目「歴史総合(仮称)」を視野に入れ、歴史を因果関係でとらえたり、比較や相互の関連などの視点で考えたりすることに主眼を置いた授業づくりを通して、深い学びの実現に向けた実践の積み重ねが求められる。

「世界史へのいざない」での主題学習は、世界史Aの導入的性格を持つとされており、中学校までの学習経験を踏まえたテーマ設定や授業方法の工夫を通して、見方・考え方の中学校から高校段階への習熟の程度を高めていくステップとしての意味を持つ。大項目「世界史へのいざない」の効果的な活用を図ることで、生徒の世界史への消極的な敬遠が積極的に世界史学習に向かおうとする姿勢、態度に変わるよう期待したい。